

## 牧口常三郎著『人生地理学』41の書評

塩原将行

2003年10月15日は、人生地理学が出版されて100年の佳節を迎える。人生地理学の書評は牧口自身が触れている『地学雑誌』の小川琢治の書評と『平民新聞』の書評のみ知られていた。しかし、以下の書評を見ていただくとおり、当時の代表的な新聞雑誌を網羅しており、人生地理学は高い評価を得て迎え入れられていたことがわかる。これらの書評は、同時代の評価を知る上で貴重であるとともに、人生地理学の成立、当時の牧口の交遊関係等を知る上でも貴重な資料である。100年の佳節を祝う意味を込めて、現在収集できた書評を翻刻し紹介する。

なお、出来るだけ原文のまま紹介したいと考えたが、①紀要が横書きであるため、縦書きを横書きにした。②変体仮名を改めた。③旧字体については、なるべく原文の香りを残したいという観点から、2003年段階でJISコードに登録されているものについては、極力、旧字体を用いた。登録されていないものについてのみ、新字体に変換した。④人名については、極力旧字体を用いることとした。⑤二文字の返り点は、ゝゝと表記した。⑥判読できない文字は■とした。

収集にあたり、『文庫』については秋成史郎氏、『大阪朝日新聞』については浅井學氏の調査による。訂正増補に対する書評、地方新聞の書評の収集は今後の課題である。

### 目 次

#### <新聞の部>

1	帝都書籍新報	明治36年10月10日
2	報知新聞	明治36年10月19日
3	二六新報	明治36年10月19日
4	日出国新聞	明治36年10月19日
5	都新聞	明治36年10月20日
6	神戸新聞	明治36年10月20日
7	時事新報	明治36年10月21日
8	萬朝報	明治36年10月21日
9	人民	明治36年10月23日
10	日本	明治36年10月23日
11	東都日報	明治36年10月23日
12	大阪朝日新聞	明治36年10月26日
13	東京日日新聞	明治36年10月28日
14	大阪朝日新聞	明治36年11月 3日
15	毎日新聞	明治36年11月12日

16	平民新聞	明治36年11月22日
17	東京朝日新聞	明治36年11月27日
18	大阪毎日新聞	明治36年12月 8日
19	讀売新聞	明治36年12月15日

<雑誌の部>

1	地學雜誌	明治36年10月15日
2	讀書界	明治36年10月15日
3	東京經濟雜誌	明治36年10月24日
4	實業之日本	明治36年11月 1日
5	日本人	明治36年11月 5日
6	教育學術界	明治36年11月 5日
7	史學界	明治36年11月 5日
8	教育實驗界	明治36年11月10日
9	慶應義塾學報	明治36年11月15日
10	東洋經濟新報	明治36年11月15日
11	北海道教育雜誌	明治36年11月25日
12	歴史地理	明治36年12月 1日
13	獨立評論	明治36年12月 3日
14	實驗教授指針	明治36年10月 8日
15	帝國文學	明治36年12月10日
16	日本之小學教師	明治36年12月15日
17	文庫	明治36年12月15日
18	地學雜誌	明治37年 1月15日
19	教育時論	明治37年 3月 5日
20	東亜の光	明治38年 3月15日

<明治41年10月5日改訂増補第8版の書評>

21	教育界	明治42年 1月 1日
22	地學雜誌	明治42年 1月15日

本 文

<新聞の部>

- 1 『帝都書籍新報』 第14号 帝都社  
明治36年10月10日・4面 寄贈書紹介(到着順) 書籍類之部

●人生地理學 (牧口常三郎著)

地理學も他の科學の如く成るべく原因結果の關係によりて説明せざれば是れか研究上何等の趣味あるなく、勢ひ死學たるを免れずとは方今學者社會一般の輿論なれ共、本邦には未だ之れに



5 『都新聞』 都新聞社

明治36年10月20日・1面 新著紹介

▲**人生地理学** 人生地理学とは何より地と人との関係を観察したる地理学の意なるが如し即ち人類の四周を圍繞せる自然は絶えず人類の物質的精神的諸般の生活に影響するが故に其各要素と人類の生活との関係を観察したるもの即ち此書なり著者牧口常三郎氏は嘗て北海道師範學校に地理学の教鞭を執り講餘數年の刻苦を積んで此書を爲す元來乾燥無味なる地理学も人の生活問題と接觸するに及んでは多趣味にして人生に直接の痛痒を感ずる實用緊切の學科と爲らざるを得ず島と英雄及罪人、半島と文明、山脈の方向と人生、海洋と心情、港灣の盛衰より地上の動植物、産業地、都會及村落地等にまでも論及し二千頁の大冊を成す其説論の斬新と材料の精選記事の流暢なる蓋し現時稀に見るの大著述なり發行所は東京神田神保町富山房

6 『神戸新聞』 神戸新聞社

明治36年10月20日・5面

『人生地理学』の著者に與ふ

齊藤生

『人生地理学』の著者牧口榮三郎君貴下。本日、偶然足下の賜たる高著を手にして、予は實に快然たらざるを得ざる也。足下が平生の心血を灑ぎたる『人生地理学』はこゝに昂然として、明治の學會を濶歩するに至れり。予まことに、これが爲めに雀躍せざらんとして得べからざる也、されども、予の足下の爲めに祝せんとするは、獨りこれに止まらず、否寧ろ他の理由ありて存する也。予の金港堂に入るや、所謂冠せる沐猴の壘流のみ、商賈流轉滑脱の群才の中に在りて、蓬頭垢面実に一介の書生のみ、時俗の習を逐はずして、聊か氣を負うて心私かに樂しめり、夫れ皆圓轉壁のごとき才子のみ、獨り足下は榮として、明星のごとく、異彩を放てり、されども、人は俯して行く也。明星の天に在るを認めずして、肥豚の地にあるを逐へり、足下が一年ならずして、去るや、寧ろ其突飛に驚けるのみ、予は獨り足下の爲めに之を喜ぶこと深かりし。

超えて二日、霜は都を封じて、人は虫のごとくに這へる時、明星は、天を離れて、われを訪へり、来意如何、君懷より志賀君の所謂六寸強の古原稿を出して曰く、僕の愛着は則ち是のみ、人生の事また問ふの暇あらんや、とりて之を見る、今にして悟る、此套然たる『人生地理学』一篇是也。

君突如としていふ、足下は尾崎行雄氏を識れりや。予いふ、予深く彼を識れり、されど、足下と尾崎氏と何の關するところぞ。予の愚、ひそかに足下が腰を權門に屈して、この六寸の原稿の序を得んとするものなりと速斷し。其識の卑きを嘲り聊かこれを諷せし也。君曰く、氏は天下の傑人たゞ只彼の風貌に接せんとするのみ、予こゝに於て、君が万難の中に立ちて、能く數年の長日月をこの著作に專念して倦まざるの餘裕ある所以の道を知れり、足下は一方に於て、學に學び、一方に於て人に學ばんとするか、快く一書を尾崎氏に添へたり。たまゞ政界の波瀾万丈、尾崎氏常に不在、氏は遂に會はず、後數日、君また茅屋を叩きて、欣々として曰く、さきに、われ人を失ひ、今、學に遭へり、學とは何ぞ。曰く、志賀知川と相見たりと予掌をうつついふ。足下既に人物たり、尾崎氏に會せざるを憾みず、而も學者として知川氏を識れり、何の幸ぞ、乞ふ一酌を過せ、足下杯を舉げていふ、明治二十四年、北海道師範學校に教鞭を執りてより十二年『人生地理学』のこと、夢寐なほ忘れず、さきに某々

書肆に諮りて、失敗を重ね、失望極に達せるも、なお志を勵まして、今日に至り、二千枚の原稿半虫に蝕せらる、今漸く光明を得て、手垢に麤されて、字を辨ぜざるものも俄かに明かに讀むを得たり、志賀氏は予の爲めに燈なり。予手を執つて、足下の苦心を賞し、相抱いて、狂喜せり、これは昨年のごと也。

足下、予は當時、既に足下の爲めにいへり。恐らくは、この名著を出版するの義侠あり、識見ある書肆なからん。こゝに於て、予は相場、泥棒、人殺し、何事をなしても、今こゝに万金を有せば予の身死して、足下の光榮あり苦心を生かすことを得ん、小膽愚直予のごときものを友とせる足下は不幸也。相顧みて嗟然として笑ふ、足下の面上、この嗟然の中、なほ、暗愁の漲るごときものありしは、正坐せし予の眼底今なほ存するところ。これも去年のごと也。

本年の春、三たび足下と金港堂に遭ふ。足下、脇にせる校正刷一封を出していふ。君乞ふ安んぜよ。『人生地理學』活字となれり、詳かに、その後の経過をいふ、予は全く、志賀氏の盡力になれるを知り、氏の爲めに、其主義を仰慕し、書肆文會堂の任侠を喜び、これより、途上足下に逢ふも、迫りて例の校正刷を見んことを冀へり、朱字の批評は矧川氏の手書、寧ろ血を以て書けるがごとくに輝けり。それかくのごとし、今、予がこの書を手にして、雀躍せざるべからざるもの、理なしとするか。否、否、予の言はんとするところはこゝにあらざして他にあり。

足下は一面に於て、しかく堅忍にして、學士の風を具へたるに拘らず、また一面に於て實に大成の素を有せり、大抵の學者が年俸千圓、數千圓、なほ、酒債、色債家に滿つる時に方せりて、足下は無名の士を待つに薄き世間の冷酷に耐へ、妻子の爲めに、良夫、嚴父たり、世間に對しては、清廉儉約の紳士たりしことこれ也。學者が通有の粗笨傲慢の風なく、渾然たる性格の美を抱いて、沈着にして、寡黙なりしことこれ也、予は學者として素より足下を尊敬す、しかもまた更に深く人物として足下を畏敬す。唯、期す、この一卷、なほ足下の全豹なりといふべからず、更に十倍の堅忍を以て百年の大作を企てられんことを。

予、無爲、斯學の智識なく、況やこの苦心の作を批評するの大膽をや、いさゝかこの書を足下の活歴を知れるの因を以て之を江湖に紹介し、世の志を愛する仁者に向つて一本を薦むるのみ。

## 7 『時事新報』 時事新報社

明治36年10月21日・1面 新刊紹介

●人生地理學 著者牧口常三郎氏は地理學が人生に必要な學なるに拘はらず教育上往々輕視せらるゝの傾きあるを慨し是れ畢竟我國從來の斯學が人生に關する部面の觀察を怠りしが爲めなりとて専ら兩者の關係を研究し地理の人生に及ぼす感化影響の大なるを明にせんと志望を懷き遂に本書を著したり著者の計畫は甚だよし而かも本書の解釋する所未だ甚だ透徹せざるの憾なき能はず又自ら其好む所に偏して普通一般の感興を惹くに足らざるべき點を捉へ今更の如く嘆美し推稱するの嫌なしとせず但し是れ所謂白璧の微瑕にして大體に於ては好著たるを失はざるべし況や著者が此志望に熱心なる筆端時に生氣を帯び尋常一様の著書と異なるものあるをや尚ほ著者が本書著述の心意發動に關して自己の私事を語りたるは頗る興味あることなり斯くの如き事實は多く列記されたきものなり（神田小川町文會堂發行定價二圓）

## 8 『萬朝報』 朝報社

明治36年10月21日・1面 新書略評

▲**人生地理学** (牧口常三郎著) 従來人文地理若くは政治地理と稱せられたるものにして、人生と自然現象との關係をあらゆる方面より精密に周到に説明し論究したるの書なり、体裁美麗、秩序整頓、文辭流暢、加ふるに新工夫の地圖を挿入し、洵とに趣味の津々たるを覺ゆ。若し夫れ著者が本書を大成するに如何に苦心せしかは志賀重昂が此書に序せるの言辭に依りて知るを得べし、志賀曰く「既成の草稿厚さ六寸に餘るものを予に示し且曰く明治廿六年來北海道師範學校に教職を奉ぜしも此志を果さんため三十四年職を辭し専ら之れに當れりと、……今年春衆議院選舉の事を以て三河に在るや君三河に來り、其の著述に批評せん事を求めらる、予力及ばずと雖ども君が衣食の窮乏に耐へ、而かも屹々として其志を成さんとするに感じ、乃ち之を諾し、歸京後此書の校閲及び批評に當る事茲に半年餘、……抑も此著原稿二千ページに上らんとす、唯だ出版の都合によりて今之を其半に縮めて公行す、之れ君の爲めに恨む云々」と、吾人は此の浩漭なる大著作を萬事不便なる境遇の中に成就したる著者の耐忍と精力に深く敬服せざるを得ざるなり (旭川 定價二圓、小川町文會堂)

## 9 『人民』 人民新聞社

明治36年10月23日・1面 新刊

▲**人生地理学** (牧口常三郎著) 題名の一見滑稽なるが如きに引換へ中々趣味ある書なり由來科學的の書の兎角乾燥無味なるを以て世に飽かず思はれたる今日此如き著書ある先づ歡迎すべし之は其名の示すが如く地理的現象と人生の物質的及び精神的諸般の方面との關係を細説し以て各種に涉れる地理学の原則を確定したるもの志賀重昂氏の批評及び追補ある殊に裨益する所あるべし製本の美紙質の豊なるに比して價の廉なる又喜ぶべし (定價金二圓) 神田區小川町文會堂同神保町富山房發兌

## 10 『日本』 日本社

明治36年10月23日・3面 新刊紹介

○**人生地理学** (牧口常三郎著 定價二圓 神田小川町一、文會堂發行)

著者は非常なる篤学者ださうで、此書の如き非常の苦心を経て世に出した者なることは、讀者の直に首肯する所である、山、河海、島、半島、氣候、生物等の地理的現象と、人生の物質的及び精神的諸般の方面との關係を説き、政治地理、軍事地理、經濟地理、商業地理、宗教地理、都會地理等の原則を確定したもので、たしかに地理学上に一生面を開いたものだ、地理学といふとスグ引合に出る志賀炯川が、半年餘もかゝつて校閲したものとある

## 11 『東都日報』 東都日報社

明治36年10月23日・1面 新刊紹介

▲**人生地理学** (全) 神田區小川町一番地

發行所 文會堂

牧口常三郎氏の著作に係り志賀重昂氏の校閲批評に成る同書發行されたり九百九十五頁に涉る法漭にして廣く地理学に關する事項を落ちなく網羅せり牧口氏は曩に教育の任に在り地理学の重要な地位にあるべきを兎角輕んぜらるゝを深く慨し多年の間衣食の窮乏を耐え忍び而かも屹々として其志を成せしもの元來二千頁に上らんとせしを出版の都合に依り其半ばに縮めて公

行せしものなりと云ふ紙質堅緻印刷鮮明なるが上精細完備せる地圖挿畫もあり斯學研究の人々には座右缺く可からざるもの是非に一本を購求すべき價值充分なりと信ず（松溪記す）

12 『大阪朝日新聞』 大阪朝日新聞發行所

明治36年10月26日・6面 讀書社會

○近刊述作中特に筆すべきは牧口常三郎氏著の『人生地理學』（東京文會堂）なるべし、其内容如何を知るに先だちてわれ等はその述作の用意甚だ熱誠なるを紹介するを禁じ難し、著者は其志を成さんために教授の職を辭し、衣食の窮乏に堪へて専心此に従ひ、原稿二千頁の書を作り、志賀重昂氏の校閲批評また半歳を費して初めて公刊するに至れりと、其述作に對する忠實眞摯は元より學者の本分ながら、現下輕佻者流少からぬ讀書社會には大に推奨すべきものといふべし、尙然大冊一千餘頁、四篇三十四章に分ち、人類の生活處としての地、地人相關の媒介としての自然、地球を舞臺としての人類生活現象等所在物象と人との交渉に論じ、地理學は地と人生との關係を説明する科學なりと結論す、網羅餘ありて時に散漫の點無きに非ざるも、本邦に在りて組織的地理學を人生に繋けて説き、地理學の眞義を發揮したるものは、蓋し内村氏の『地人論』を先聲として此の如く整備せるは未だ之あらざるなり、われ等曩に學術人生の交渉切實となれる讀書社會の現象を歓迎し今は此良書を得、また學界の幸なりといふべし

13 『東京日日新聞』 日報社

明治36年10月28日・7面 新刊雜書

●人生地理學 牧口常三郎氏が多年の研究に依り得たる處の著にして地と人との關係觀察の起點としての郷土如何に周圍を觀察すべきか地球島嶼半島及岬角地峽山嶽及谿谷平原河川湖沼海洋内海及海峽港灣海岸無生物大氣候植物動物人類社會其分業生活地理農業地論國家都會村落生活競争文明各地論結論等章を分つもの三十四斯學上有益の書といふべし（神田小川町文會堂價二圓）

14 『大阪朝日新聞』 大阪朝日新聞發行所

明治36年11月3日・11面 新刊紹介

◎人生地理學 牧口常三郎著  
此書の近來有數の著なることは十月廿六日月曜讀書社會中に略記したるが如く地理學を人生生活の諸方面に繋けて説述したる者先づ地理學とは如何なるものかを人生の主觀的方面より論じ更に客觀的に天文に關したる人生の状態を見島嶼山川海洋港灣等が各人生に意義を有することを順次に説述し無生物氣象植物動物及人類の相關を述べ生活現象と地理と關鍵より文明地論に及び究するに地理學は地人相關を説明する科學なりとの見地に到達す挿むに數十の精細なる圖畫を以てし頁數一千餘志賀氏の批評あり此書出で、地理學研究の趣味は蓋し多大の進歩を一般社會に與ふべきを疑はず書中なほ散漫の處あれと兎も角も從來の地理學と人生との關係を説きたるものこれほどに組織的なるものなければなり著者の苦心して此の大作をなせしは此書を推薦すると共に記すべきことならん（價二圓、東京神田小川町文會堂）

15 『毎日新聞』 毎日新聞社

明治36年11月12日・1面 新刊批評

◎人生地理学〔牧口常三郎氏著  
神田小川町文會堂發行〕

著者は曾て師範學校に教鞭執りし人、其地理學に趣味を感ずるや遂に職を辭して辛苦以て殆と一千頁の大作を成功せしと云ふ、地理と人文と密接の關係あること言ふまでもなし、本邦此の關係に筆を容れたる著作なきに非ずと雖も其の能く問題を網羅せるもの蓋し本書を以て嚆矢とせん、著者が眞面目の人にして述作一に誠意に出でしことは各章末に列記せる引用書目を見て其一端を徴すべし銜學流行して英米獨佛の書籍を引用するに非れば學者の不名譽とする今日に當り、敢て自國學者の著書及び譯書を明記するは常人の爲し能はざる所なればなり、地理學に堪能なる志賀重昂氏特に親切なる校閲を行ひ間々評言を挿む讀者に感興を與ふること一層なるを覺ゆ（定價金二圓）

16 『平民新聞』 平民社

明治36年11月22日・7面 新刊批評

▲人生地理学（牧口常三郎著）地と人との關係を説明したるもの也、人間の生活する所として地球を研究したるもの也、別に創見と稱すべき點を認めずと雖も、多くの地理書より掘り出せし土塗れの材料を一々丁寧に洗ひ上げて之を手際好く排列したる勞力と技術は、充分著者に向つて感謝を拂ふべき價值あり、菊版九百九十五頁の大作、全編簡にして明、明にして透、何れの頁に對するも人をして冗漫重複を覺えしめざるもの、斯學に素養ある者にあらざれば能はざる所とす、文章に堪能ある者にあらざれば及ばざる所とす（銀月）（定價金二圓富山房）

17 『東京朝日新聞』 東京朝日新聞会社

明治36年11月27日・7面 新刊各種

◎人生地理学 人生地理てふ名目は一見奇なるが如しと雖も人生と地理との最も關係の密接なるを知らば今何ぞ疑を挿んや既に商業地理あり政治地理あり人生地理亦之なかるべからず否 商業地理政治地理經濟地理國際地理軍事地理宗教地理都會地理文明地理之を綜合したるもの即ち人生地理學なり著者が其嗜好に基ける多年の研究と其職責に依れる教育上の實驗とによりて手記抜抄積んで一大冊子を成したるもの緒論より起りて（一）人類の生活處としての地（二）地人相關の媒介としての自然（三）地球を舞臺としての人類生活現象の三編を経て結論に及ぶ三十有四章、乾燥なり易き地理學をば最も趣味多く頗る愉快に書なされたり而して此書の内容以外に於て更に賞賛に値するは著者と此書を大成せんが爲に北海道師範學校教諭の職を抛ちて衣食窮乏の中に其目的を遂げたと志賀重昂氏が生面の著者の爲めに半歳の日子を獻じて校閲批評せると及び無名の書肆が無名の著者の爲めに此比較的大部九百九十五頁（原稿は二千頁なりしも出版の都合にて半減せりと）の書を出版せるとの三事なりとす（牧口常三郎著神田小川町一番地文會堂發行、定價二圓）

18 『大阪毎日新聞』 大阪毎日新聞社

明治36年12月8日・8面 新刊雜著

◎人生地理学 牧口常三郎著



吉田松蔭の「地を離れて人なし人を離れて事なし人事を論ぜんとせば先づ地理を究めよ」を引用し地理的智識を以て恰も人生の最要義とも思惟しらが如き本書は、これを地理學といはんよりも寧ろ地理學上より觀たる人文發展の關係を記述したるが如き觀あるは特に熱誠なる著者のために惜む所なり然れども唯これあり之あるが故にまた從來に於ける地理學の狭少なる範圍及び乾燥無味なる常軌を脱して政治地理學上優に一新生面を開けるが如き感あるは吾人の否定せんと欲して能はざる所なり唯憾む其分類法の今少しくシステマチカルたらまほしきことを此著既に定評あり而かも吾人の猶ほこれに付て望蜀の情を述ぶるは一面明にこれを敬愛するの念を藏すればなり（東京神田小川町文會堂同裏神保町富山房發行、定價二圓）

## 19 『讀売新聞』 讀売新聞社

明治36年12月15日・1面 新著梗概

◎人生地理學（牧口常三郎著）

人生の語ハ通常人の一生人の生活の二様に使用さる本書ハ其の後者に取り人類生活に於ける百般の事情と地理上の關係を説けるもの千頁に近き大著にして人類の生活處としての地、地人相關の媒介としての自然、地球を舞臺としての人類の三大編に分ち各編數十の小項目を掲げて■港山河植物氣候の地に關するもの國家社會生産生存の人に關するもの皆數十頁を費して詳説し尚ほ足れりとせず進んで研究に資せん爲め各章の終りに參考書目を附記したるなど著者の用意周到を極む

### <雑誌の部>

#### 1 『地學雜誌』 第15輯第178巻 東京地學協會

明治36年10月15日 新刊紹介

●牧口常三郎氏著人生地理學 地と人との關係に就きて言ふべきことは多し、此の書は人の或は謂はんと欲し未だ謂はざりし所、或は謂ひて未だ盡さざる所に就き謂へるものにして、其思想の斬新にして行文の面白きは特色として紹介すべきものなり、徹頭徹尾志賀矧川先生の手にて校閲と批評を加へられたれば、更に一層の光彩を加へたるはいふまでもなし、本編は約一千頁に近き一大冊にして近來の大著作なり、著者の熱心と注意とは矧川先生の序文にも見ゆるが如く、滔々たる通俗の著書と其撰を異にせり吾人は熟讀せる上更に詳に批評を試むべし、（東京文會堂出版）

（零 丁）

#### 2 『讀書界』 第1巻第1号 富山房

明治36年10月15日 雜報 人生地理學の出版

◎人生地理學 と題せし大著今回出版されたり。著者牧口常三郎氏は篤學力行の士、洽く内外幾多の書を涉獵し研鑽多年、あらゆる人生の方面より地理の觀察研究を試み、從來乾燥無味なりし地理學の上に一生面を開かんとの用意より本書を編せられたるものなり。されば、政治地理、商業地理、軍事地理、交通地理等苟も事の人生と地理に關するものは、爬羅剔抉盡さざるなく至らざるなし。眞に近來出色の好著なり。加ふるに地理學の上に一種の眼識を均有せらるゝ志賀重昂氏が、一々獨特の筆を以て批評校訂の勞を執られたれば本文と批評と相映て一段の光彩を放てり。尚ほ詳しくは本誌廣告にあり。就て看られよ。

3 『東京經濟雜誌』 第48巻第1206号 經濟雜誌社

明治36年10月24日 新刊紹介

●人生地理學 牧口常三郎著  
志賀重昂校閲

人生地理學とは人文地理若くは政治地理に對する異名にして人生と自然との關係を解説せしもの著者は三年前迄北海道師範學校に教職を奉ぜしが本書編纂を思立ち遂に其職を抛ちて一意之に従ひ本年漸く完成せしものなりと云ふ千頁に垂んたる大冊余輩未だ通讀の暇を有せずと雖著者の勞苦や則ち多とせざるべからず(定價二圓、文會堂發行)

4 『實業之日本』 第6巻第22号 實業之日本社

明治36年11月1日 新刊紹介

◎人生地理學 浮誇なる出版物多き間に眞面目なること本書の如き蓋し類少なかるべきか、緒論、人類の生活<sup>(マ)</sup>所としての地、地人相關の媒介としての自然、地球を舞台としての人類の生活現象、結論の五篇三十四章に分ち、山河湖海島半島氣候生物等四圍の地理的現象と人生の物質的及び精神的諸般の方面との關係を細説し、所謂地理學の根本基礎を趣味ある筆に書きたるものなり。特に第三編地球を舞台としての人類生活現象の如き最も趣味を以て讀まるべきものなり、全部約千頁尠然たる一大冊子なり、又著者獨特の考案に成れる地圖及び挿圖あり、志賀農學士が精確なる校正と精細なる批評及び追補を加へたるか如きも此書の長とする所なるへし、想ふに志賀氏の地理學講義は斯學に一新機軸を出し普く社會に歡迎せられたるものありしが、本書は爾後に於て更に豊富なる材料を整然たる系統的に論述したるもの唯一なる可し。地誌を研究せんとするものは原則基礎たる可き本書を繙くべく、實業家教育家亦本書に依りて益する所少なからざる可し、吾人は之を以て近來の好著として讀者に推薦するに躊躇せざるなり(牧口常三郎氏著定價二圓、神田區小川町一番地文會堂書店)

5 『日本人』 第198号 政教社

明治36年11月5日 新刊

◎人生地理學 牧口常三郎著

「人生地理學」とは實に人耳に新たなる名稱なり、著者は之を釋して曰く世には「政治地理學」の名稱ありて「自然地理學」に對しての意義に用ひらる、されど「政治」といふ一般の概念よりすれば其稱の不當なるは明かなる所、是に於てか是に代はるに「人文地理學」の名稱あり、之を單に「地文學」に對しての名稱とせば可ならんも、其他に於ては精確に内容上の意味を表はさず、從ひて世間の之に對する概念は頗る廣漠たるを免かれざるが如し、然らば「人類地理學」といはんか、之れ比較的本書の内容を表はすに適當なりと雖も、既に「人類學」なるものありて特別の意味に用ひられ居るが如きを奈何せん、偶々「人生」なる熟字は最も本書の内容に對して適切にして而かも一般に漸く用ひられ來れるが如ければ、寧ろ斷然之に従はんにはと……乃ら姑らく之を假用して他日適當なる名稱の出づるを俟つこととせりと。知るべし「人生地理學」とは純乎たるポリチカル・ゼオグラフ<sup>(マ)</sup> 井一の義にして、政治的經濟的宗教的軍事的學術的諸方面に於ける人類社會の生活と地理との關係を論じたるものなることを。一千頁に近かき大冊、「緒論」、「人類の生活處としての地」、「地人相關の媒介としての自然」、「地球を舞臺としての人類生活現象」、「結論」の五編に大別し、更に章に小別し、節に細別し、穩健にして而かも雅致ある筆もて、山河湖海島半島氣候生物等の地理的現象と人生の物質的精神的方面と

の關係を説き、從來地理學といへば唯だ國名地名山名川名などを羅列せる乾燥無味なるものとのみ想はれたるに反し、盡きざる興味を感ずる際に於て、地理と人生とに關する許多の智を取得せしむ、此點に觀て、實に地理學に一生面を開けるものと謂ふて不可ならず。特に此の浩漭たる大冊子、我國に於ける地理學と題する書中他に殆ど類を見ざる程なる此の大冊子が、地位名聲なき一個の隠れたる篤學者の獨力に成りしをいふに至りては、余は著者其人の辛苦と忍耐との必ずや非常なりしを念ひ、衷心よりの敬意を以て本書に接せざる能はざるなり。書中各處に散見せる志賀矧川氏の評言數十篇は又た本書に補ひある大なるもの、卷頭及び卷中の諸處に挿入せる價值ある數様の地圖と共に、本書とは離るべからざる關係を有すとやいふべき。要するに本書は音に其の外觀に於て大なるのみならず、内容に於ても亦た從來嘗て他に類を見ざる好地理書たりとすべし。(神田區小川町一、文會堂發行定價金貳圓)

## 6 『教育學術界』 第8卷第2号 東京同文館

明治36年11月5日 新刊紹介

◎人生地理學 全一冊

志賀重昂校閱批評 (東京 文會堂發兌)

牧口常三郎著

人生地理學とは從來未だ多く聞かざる名稱なり。されは著者も本書にこの名稱を以てすることには、よほど躊躇し且つ苦心したるものと見ゆ。從來用ひ來れる政治地理學若しくは人文地理學などよりは、今一層廣汎にして精密なる意義にて人生地理學と名づけたるが如し。即ち人類の生活上に於けるあらゆる事變と地理學との關係利用を、つとめて詳述せんとしたるものなり。全編三十四章より成り、地人の關係、如何に周圍を觀察すべきか等を以て緒論となし、第一篇には人類の生活處としての地を、たゞ自然のまゝに述べ、第二篇には、地人相關の媒介としての自然と題して、無生物及びその諸變化現象、動植物、人類に就きて述べ、第三編には、地球を舞臺としての人類生活現象、即あらゆる社會上の事變關係機關等を説明し、結論として地理學の研究法、地理學の意義及び範圍、地理學の豫期し得べき効果を明かにせり。なほ毎節その贅頭に志賀學士の批評を加へたり。菊版五號文字にて約千頁の大冊、鮮明なる地圖寫眞十數葉を添ふ。著書の勞亦大なりといふべし。(定價金貳圓)

## 7 『史學界』 第5卷第11号 史學界事務所

明治36年11月5日 批評

人生地理學 志賀重昂校閱兼批評

牧口常三郎新著

東京市神田區小川町

一、文會堂 (定價二圓)

著者は嘗て北海道師範學校に職を奉じ、深く地理學教授の必要なるを感ぜられ、之によりて以て教育上の痼疾を醫せんと欲し、斷然意を決して己れの教職を擲ち再來潛心一意遂に此の快著を見るに至れり、斯くの如くして著者が多年の精研と又た其が教育上の經驗にもとづける此の書は、人生地理と云へる包括的名稱の下に山、河、湖、海、半島、島、氣候、生物等吾人にとりて最も必要なる自然的現象を豊富なる材料によりて論ぜられたり、而して從來地理學の缺たる乾燥無味に陥るの弊なく、結構嶄新にして立論警拔優に本邦地理學界に於て、一新機軸を開きしものと謂ふ可し思ふに此の如き書は獨り地理歴史擔任の教育者及び受験者に向て必要

なるのみならず、其他實業政治の方面に従事する人にとりても世界の大勢を考察するに就きて最も必要なり

思ふに著者は未だ多く世に知られざるの人、然かも數年間衣食の窮乏に耐えて此の書を完成せられし志は吾人の深く欽慕に堪へざる處なり而して洛陽書肆にて名あるもの數百其の間一人の立ちて此の未知の地理學者を世に紹介せしものなきに際して、書肆文會堂が此の著の發行を企てし義侠的精神に至りては著者の精力と共に吾人の深く感謝に堪へざる處なり。

今や初版既に賣切れ増版又遂に出來たりと燈下親しむ可きの侯、讀者か切に此の快著を繙かれんことを望む（灘川）

## 8 『教育實驗界』 第12卷第9号 東京育成會

明治36年11月10日 新刊紹介

◎人生地理學 牧口常三郎著志賀重昂校閱並批評

此書は本邦人の手になつた地理書中の最も有趣味なるものである、人生地理學の名既に奇抜であるが、その内容は、一にこの現在人生と地との交渉を論じて筆々活躍凡ての方面に涉り殆ど餘蘊なしである、殊におもしろいのは著者は久しく師範學校に教鞭をとられ、教育學に通じて居るから、本書材料の排列も頗る教育的に出來てゐる、純粹科學としての批評は別として、地理書として、殊に人に讀ませる地理書としては吾人大に賛成する。緒論に於て地と人との關係の概觀、觀察の基點としての郷土、如何に周圍を觀察すべきかを論じ、身のまわりの話から出發して、人間にいかん地理的關係の親密なものあるかをしらしめ、且つ着眼の處を暗示したのなど、人をして開卷惜く能はざらしむる快筆である、間々著者の意見を主張して問題外に涉るの失なきに非るも、この常識世界によませる著書としてむしろ大に活氣と興味とを添へる傾きがあり、第一編人類の生活處としての地、第二編地人相關の媒介處としての自然、第三編地球を舞臺としての人類生活現象、結論に研究法と定義とを論じてゐる、殊に感ずべきは本書の安價なことで、色入地圖數様寫眞版木版數十葉頁數殆ど一千に達して定價二圓である。地圖には現今世界文明の大勢を窺ふに足るような斬新な表がある。

## 9 『慶應義塾學報』 第71号 慶應義塾

明治36年11月15日 新刊紹介

人生地理學 菊版九五頁地圖及寫眞版木版數十枚入十月

牧口常三郎氏著 定價金貳圓 神田小川町 文會堂發行

本書の校閱及批評に任じたる志賀重昂氏の序文に曰く著者は『明治二十六年來北海道師範學校に教職を奉ぜしも、此志を果さん爲め、三十四年職を辭し、専ら之れに當れり……予力及ばずと雖も、君が衣食の窮乏に耐え、而かも屹々として其志を成さんとするに感じ、乃ち之れを諾し、歸京後此著の校閱及び批評に當ること茲に半年餘』云々と、以て著者が如何に斯學の研究に熱心なるかを知る可く、又志賀氏が後進を誘掖することの如何に親切にして、從て其校閱批評の如何に叮嚀なるかを察す可し、單に地理學と云へば乾燥無味なる學問の如くなれども、それは從來の教授法が宜しきに適せず、學生をして強いて暗誦にのみ懇へしめたるが爲めにして、地理學其物は決してかゝる乾燥無味なる學問に非るのみか、本書の如く廣く人生と地理との關係を詳細に説論するとき、世間恐らく研究の版圖濶大にして趣味實益の多大なる、斯學に如くものあらざらん、著者は博く諸書を參照し、文字の修飾にも頗る力を致したるが爲め、讀者をして面白く通讀せしむるの側ら、自ら地理と人生との關係を知悉せしむるのアツトラクシヨ

ンあり、唯我輩の少しく本書に憾みとする所は参考の書類邦書及び邦譯の書に偏して、メークルジョンの比較地理書等二三の外、斯學に關する泰西諸大學の著書を脱せしことこれなり、然れども是れ或は望蜀の注文ならん、兎に角本書が地理學趣味の開發に裨益することは少小に非る可し、我輩は中學校師範學校等の教職に在る者、若しくは文部省の受験者等には無二の参考書として推舉するを憚らざる者なり。

## 10 『東洋經濟新報』 第286号 東洋經濟新報社

明治36年11月15日 新刊紹介

●人生地理學(牧口常三郎氏著) 本書は約千頁の大冊にして、四圍を圍繞せる自然即ち山河、湖海、島嶼、氣候、生物等諸々の地理的現象と、人間の物質的及精神的諸般の方面との關係を細論したるもの、是れ即ち本書の特色とする所、而して其包含するもの、緒論に於て地人の關係を概論し、第一編人類の生活處としての地、第二編地人相關の媒介としての自然、第三編地球を舞臺としての人類生活及現象及結論を以て終り、各編十有餘章に分ちて卑近の實業政治等より深遠なる哲學、宗教に至る迄で、苟も人生に關する地理的干係は盡くして餘す處なし。加ふるに斯學の泰斗として稱せらるゝ志賀氏の奇警なる觀察を以て每章に精細なる批評及び追補を加へ、且つ數種の地圖を挿入して其對照に便せり。蓋し從來の地理書とは全く其撰を異にし、正に斯學に一生面を開きたるもの、地理歴史の研究者に取りては勿論、教育家實業家に取りて好個の参考書たるを失はず(定價二圓、發行所、神田小川町文會堂發行)

## 11 『北海道教育雜誌』 第130号 北海道教育會

明治36年11月25日 新刊書紹介

●牧口常三郎氏の著書

人生地理學 東京神田區小川町

發賣所 文海堂

定價貳圓

曾て久しく本誌編纂に力を致されたる牧口<sup>(マツ)</sup>常三氏頃日一書を著はし、題して人生地理學といふ。梓成るや其の一帙を予に贈り、且つ予の批評を求めらる。予はもと斯學の眼なし、敢て之れが評隲をなすが如きは、予の任にあらず。然りとはいへども予は深く子の經歷を知り、厚く子の性行に服し、又克く子が本書刊行の趣旨の存する所を識るものなり。即ち子の成功を祝し、廣く其の由來を世に紹介するは予の義務たることを知る。子は明治二十六年本道師範學校を卒業し、爾來職を同校<sup>(マツ)</sup>を奉じ、篤學力行の名あり。子が教育學に精通し、殊に其の單級教授法は子によりて、殆んど始めて、本道に紹介せられたる功は、既に世の是認する所なれば、茲に言ふの要なし。子はただに教育學に造詣する所あるのみならず、地理學の研究に於て一見識を有し、常に曰く若し此學の教授法にして今少しく改良せらるるを得ば、現今に於ける教育上の痼疾の大半は之を除去するを得べしと、子は實に在學中より斯學の闡明につき大に期待する所ありしなり。吾人は學科中最も無味乾燥恰も蠟をかむの感ありとして、常に之を嫌厭し、只試験てふ關門を通過するために、僅かに一衣の記憶を腦裏に託するさへ、既に無上の苦艱とせる此學問に對し、子は異様(吾人の考より見れば)の趣味を以て之を迎へ、新聞に、雜誌に、官報に苟も記事の地理に關するものあれば、必ず精讀翫味し、以て無上の愉快を感じるものゝ如し、子が卒業間もなく文部の試験に應じ、地誌教育二科の免許を得たるも、偶然にあらざるなり。子は師範學校に在職すること九年孜々屹々益々斯學の研鑽につくし、腹案畧ぼなる、而も子は

尚ほ之を以て足れりとせず、如かす一たび學術淵叢の東都に出て、更に藎奥をきはめ之れか完璧を期ぜんにはと、三十四年斷然意を決して上京せり。爾來斯に圖書館内に萬卷の書を獵り、夕に斯學の大家を叩いて意見を戦わし、推敲幾年這回終に約千頁に渉る一大著述を公にするに至れり。子は固より敢て資財の餘裕あるにあらず、將又學界に於て尚ほ無名の士なり、子は此境遇に處し、あらゆる辛酸に堪へ、萬難を排斥し、終に十有五年間の宿志達せられたるものにして、子の胸懷快然禁する能はざるを察すべし、予等同人亦實に滿腔の誠意を以て其の慶祝を分つに吝ならず。嗚呼子は實に多年一日の如く終始一貫遂に大成を告ぐ、其堅忍不拔の志操敬服するに堪へたり。

本書論する所は地理と人生の關係にして、經濟的、政治的、宗教的、學術的其他あらゆる、人類社會の物質的及精神的兩方面の生活と地理と相交渉する所以の原則を究め、複雑紛糾せる社會人生の問題をあげて、之を地理上の事實により解説を與へたり、看察の精覈にして、着眼の抜奇なる、信に地理學研究上に一生面を開きたるものといふべし。文章亦頗る優雅にして、而も筆力勁健、往々時事問題に論及し奮腕の慨筆外に溢るゝものあり、加ふる地理學上に一種の眼識を有する志賀重昂氏が、一々獨特の筆を以て批評を加へられたれば、本文と批評と相俟て一段の光彩を放てり。惟ふに學界は本書によりて多大の裨益を受け、教育界は此書に依り教授法上に至大の改良を與ふる指針ならん、吾々教育に従事するもの必ず一讀すべく、又大中小其他各種の學校に於て地理學の參考書に加へて缺くべからざる良書なりと信ず。

(Y. W生)

附言 本書の價値は東京諸新聞に於て遺憾なく發表せられ皆近年の一大著述にして彼の嗜好を追へる行々たる小冊子と趣を異にせることを賞せざるはなし況んや本評は充分に本書の眞相を穿ちて一言の間然すへきなきが故に蛇足を要せざるに似たり吾人は著者が觀察精細にして大小漏らさず巧に之を組織して此大著を爲せしを偉なりと認む又文章も流麗にして巧に人生と地理の關係を發揮せしを信す唯着眼中正温雅にして未だ斯界に新機軸を出せしものと謂ふへからず著者が將來の大成に待つもの深し(扇楡)

## 12 『歴史地理』 第5巻第12号 日本歴史地理研究會

明治36年12月1日 彙報及評論

『人生地理学』を歓迎す

牧口常三郎著

文會堂發兌

地理學とは何ぞ、その言葉の示すが如くに、もし單に之を『地殼の記述』(γεο+γρ,αφι.α)に過ぎずとせば、あゝまた何をかいはん、われらの信ずる處に依れば、たゞに地誌を以て、その最終の目的とするにあらずして、それ以外に於て、何者かの存在を示すものなるべし、かの乾燥無味蠟を嚙む底の記述は、よく其本旨に悖ることなきや、われは疑なき能はざるなり。

思ふに、地理學が最終の目的たるや、地殼上に打ち建てられたる社會團體、其者の生命、周圍の現象との關係を考察することあらずして何ぞや、これ即ち、地理學の進歩したる分類中に、歴史地理學、政治地理學(假に世間の稱呼に従ふ)の形に於て顯はれ來るものにして、甲は、其過去の生活を論じ、乙は現在の状態を説くもの、時間の上にする區別たり。われらは、わが學界に、いまだこれらに関する著述なき際に於て、いま牧口氏の『人生地理学』を得て、之を歓迎するもの也。

地理學は、もとより普通に世人が心得へざるべからざる學科なり、なるべく多くの人に理解し易

からしむるを本旨とするは、他の多くの科学よりも重すべき處にして、この點に於て、乾燥無味なるを避くべく、この邊に意を注ぎたる牧口氏の著を、われは悦びて迎ふものなり。

四六版千頁の著述、たゞ單に著述としても、めざましきかな其内容の如何をいはざるに先ちてわれはまづそれのみにても、著者の苦心を思はずばならず、志賀重昂氏の序に依れば、著者はもと北海道師範學校に教職を奉ぜし人、この著述を完成せんため、職を擲ちて、務むること、前後十年一夜作りの小冊子流行の折柄、あたゝ地方の教員に甘ぜずして、この大著を完ふす、著者が學界に忠なる、われは、最深の敬意を表するに吝ならざる也。

著者は、いま一本を、わが會に寄贈して、精評を求めらる、われは、世間にありふれたるが如く、もとより間に合せの贊評を好まざるもの、これ著者に對しては禮を欠き、學界に向ひては、忠を缺く、されば、精評は、他日に譲り、いま暫らく、われをして、其内容を紹介せしめよ、著者は、はじめ、地理學の世に輕視さるゝは、其教授法の不可となし、之を改良せんために、自ら教授せんとするの際に得たりし材料を以て遂には、この書をなせしものにして、これ迄散在せし材料を輯成し、之に系統序列を與へたり、題して、『人生地理學』といふ、頗る新しき命名也、從來自然地理學に對して、政治地理學なる名稱あり、この政治地理學といふ名稱は、まだしも、人文地理學などゝいふ不正當の命名をなすものあり、さらば、政治地理學に代ふる名稱なきやとは、われらの常に考慮する所なりしが、著者は、『人間の生活』といふ意味よりして、こゝに人生地理學といふ名稱を附したり、或は可ならん、なほ研究すべき也。

著者は、緒論に於て、まづ地と人との關係を概論し、觀察を郷土より初め、周圍の觀察を説きたり、本論は之を三編に分ち、人類の生活處として地を論じ、次に地人相關の媒介として自然を説き、最後に地球を舞台としての人類生活現象を述ぶ、結論は地理學其者の説明をなしたり。挿圖十餘、繪畫百餘、以て地と人との關係を説くこと詳細也。

われかつて志賀重昂氏の『日本風景論』を讀み、『河及び湖澤』を繙き、地と人生との關係を見れば、興味あることあらんと思ひたり、のち内村鑑三氏の『地人論』を得て、なほこの念を昂めたりき、今や新『人生地理學』を得るに迫りて、わが意を得ること少なからず。わらは、この快著を觀迎して世に推薦するものなり。(楓)

13 『獨立評論』 第12号 獨立評論社

明治36年12月3日 近著一班

人生地理學 牧口常三郎著

山、河、湖、海、氣候、生物等の諸門に分類し、其れに地理的現象と人生の物質的諸般の多方面の智識を包容し、而して著者多年教育上の實驗と理論とを以て成り、殊に地理學を以て名ある志賀矧川氏が精細なる校閲と批評とを加へたるを以て讀者には少なからざる興味を與ふるべし、紙質、印刷、製本可なり、之れを世の篤學の士にすゝむ。(定價貳圓文會堂發兌)

14 『實驗教授指針』 第2卷12号 金昌堂

明治36年12月8日 新刊紹介

◎人生地理學 志賀重昂校閲兼批評牧口常三郎著 東京文會堂發行 定價金貳圓

千頁四十萬言も本書は近來學界の快書也人生地理はこれ未曾有の學名卷中の百餘圖はこれ嶄新の考案其説く所地理學をして純正科學の位置に進めしめ立論警拔結構儼然として從來の地理學形式を革命せしめ社會國家政治實業と内外表裏の關係を看破し間々文學趣味を發揮して志賀の地理を鼓吹し地理學を活動せしめ地理學を人生必修科學の一たらしめたり著者は蓋し會て地方

師範の一地理教員、其斯道に忠實なる本著のために人爵的地位を去り家道困窮の裡に其唯一の目的を達せり此書一たび出れば或は地理學を維新せしめむ其日本の學界否世界の學界に貢獻するや大ならむもし明治三十六年の出版界に好著を求めば本書は確かに其首位か次位かにあらむ。

15 『帝國文學』 第9巻第12 帝國文學會

明治36年12月10日 雜報 批評

○人生地理學 志賀重昂校閱批評

牧口常三郎著

文會堂發行

大家なるかな、大家なるかな、大家の名に據らざれば傑著も多く購はれず、大家の名を戴けば劣作も歓迎せらる。世の沒識愚惡試に吾人の思惟の外にあり。是に於てか書肆は争ひて大家の門に走り、叩頭平身禮を厚うし、金帛を大にして、その空名を求む。所謂大家とはかくの如くにしてえらきものなり、かくの如くにして富むものなり、斯の如くにして聲譽赫々たるものなり。現時の出版界を一瞥せよ、彼の大家の監修といひ或は編著といひ或は校閲といふもの、中果して其實あるもの存するや、十中八九迄は悉く然らざる也。本邦學者が良心の麻痺と、書肆の横着とは正に其極に達せりといふ可し。此間に立ちて滿身の力量と一念の研鑽とによりて、一代の學藝に貢獻したるもの佐村八郎氏の圖書解題ありき、これ大に人意を強うすとに足れり。此度文會堂といへる比較的有名ならざる書肆が出版せるこれ迄有名ならざりし牧口氏の人生地理學は、其性質と容積とに於て佐村氏の著書と全然相異すと雖も、大家ならざる人が大著を公にしたる點に於て相一致す。「人生地理學」は尠然たる千ページの一冊にして、緒論、第一編人類の生活處としての地、第二編地人相關の媒介としての自然、第三編地球を舞臺としての人類生活現象、及び結論の四部より成り、更に之を三十四章數百節に區分せり。人生に關係して地理學を説き、殆んど餘蘊なきに似たり。吾人は本書の三分の二を卒讀せるに過ぎざれども、本書の長所は左記の數點に存するを認め得たり。(一) 著者の研究的精神に富み、且篤學謙遜毫もペダンドの風なきこと、序論と各章の結尾に附せる參考書目の列記とは之を證して餘あり。(二) 校閱者の親切忠實なること、世の多くの校閱者、ことに大家の校閱者が通覽だに爲さざる書に對して責任ある校閱者の名を貸すの陋風に反して、志賀氏は飽迄眞摯なる態度を以て其重任を果たされぬ。即ち上欄には加筆して著者の意を補ひ、又各章の終に往々長文の意見を附せり。(三) 人生地理學の廣濶雄大なること、即ち著者は此大主題の下に所謂地理、地文、鑛物、動植物、天文、地質の諸學より美學、社會學、政治學までも網羅したり、これ從來の偏狹なる地理學に一生面を開けるものに非ずや。(四) 叙述の法極めて文學的にして趣味に富むこと。著者は縦横に和漢の詩歌を引用し大に文采を加味せり、その海洋論の如きは好個の美文としても耻る所なきなり。吾人が本書を茲に紹介批評するは主としてこれに因す。もし強いて此種の欠點をいへば泰西詩歌の引用に乏しき事なり。地理に解釋暗示を與ふる事に於ては洋詩は遙かに和漢の詩歌を壓倒す。かのロングフエローの如きは二十卷のPoetry of places (萬國名所詩歌集) を編纂し置けり。著者もし材を此種の著述に求めたらんには錦上更に花を添うること敢て難きに非ざりしなるべし。

吾人は地理學者に非ず、故に専門的科學的批評を本書に下す能ずと雖も、吾人は實に幾多の暗示と感激と教訓と趣味とを本書に見出しぬ。吾人は今更の如く地理に現はれたる宇宙の神秘を冥想しぬ。吾人はまた卷を措いて東海秋津洲の使命を回顧して眼界頓に五大陸洲と五大海洋に



向つて開けるを感じぬ。吾人は多くの人々殊に文藝の士に對して本書の誦讀を薦む一は本書の價値のために一は所謂小家の實力に對する當然の尊敬のために。

16 『日本之小學教師』 第5卷第60号 國民教育社

明治36年12月15日 内外彙報

◎人生地理學

(出版界の一大快事)

片々たる小冊子のみの出版多き今日、糊と小刀的の著書のみ多き今日に於て「人生地理學」といふ大著書に接し得たる余輩の愉快實に甚だしきものあり、著者は牧口常三郎君、出版社は文會堂、共にこれ世に知られたる大學者にもあらず、大書肆にもあらず、著者牧口君は明治二十六年北海道師範學校に職を奉じて以來此の研究と著述とを志し十年間の苦心經營尚自ら以て足れりとせず、斷然辭職して専心之に従事し漸く成りたるなりと聞く、東京市中有名の書肆も少からざるに此等書肆の躊躇せる大著を出版したる文會堂の壯舉共にこれ一大美事と謂ふべし。

「緒論、人類の生活としての地、地人相關の媒介としての自然、地球を舞臺としての人類の生活現象、結論」の五編三十四章に分ち、山河湖海半島氣候生物等地球上の現象と人生の物質的及び精神的諸般の方面との各關係を深遠なる學說と流麗なる筆とを以て詳述せられたるが故に千頁の大冊子、而も一たび之を讀み初めたる人の其の趣味に驅られて讀み了らざれば止まざるや必せり。地理學を研究せんとする者の爲めには勿論のこと教育家、政治家、實業家等に對しても其の貢獻する所多大たるべし、吾人は實に出版界の一大快事と呼ぶを躊躇せず。

17 『文庫』 第24卷第6号 内外出版協會

明治36年12月15日 論評

人生地理學を讀む

鳥 水 生

片々たる輕薄冊子、漸く市場に迹を尋ぬ可からずなりて、大冊の豫約出版廣告、一週日の新聞に少くとも一二種を見るに至りたるは、讀書界の漸く眞面目となり、自覺に反へりたるを證するものにして、悦ぶべき傾向ながら、その多くは古書の翻刻、若しくは字彙類聚等に過ぎずして、創作にあらねば人をして多少の慊焉たるものなきを得ざらしめしが、こゝに牧口常三郎氏の手に成りたる『人生地理學』は、近來稀有の大著作として喧傳せられ、加ふるに之を校訂批評したる人は、斯學に造詣遂き志賀重昂氏なりといへば、其讀むべき書なるは明かなりと、さなきだに地理學に多少の興味を有せる余は、他の紛々たる雜著に對するよりも、以上の敬意を以てこの書を迎へたりき。

志賀氏の序に據れば、著者は明治二十六年來、北海道師範學校に教職を奉ぜしも、此書著述の志を果さんがために、三十四年職を辭し、専ら之に當り、衣食の窮乏に耐へながら吃々として努められたるなりといふ。而して此書を志賀氏に示されたるとき、既成の原稿厚サ六寸餘にして、印刷に附するに當りて二千ページに上らんとしたるを、出版書肆との關係上、之を其半に縮めて公行するに至れり、しかも君の此著を出版せんとするや、一は君が名聲の未だ知られざると、二は草稿の浩瀚なるとを以て、東京市中數百の書肆中、獨り文會堂なる、これ又世に知られざる書肆、君及び志賀氏と何等の縁故なくして、之を引き受けられたるなりといふ。

余の如き、聊か東京出版書肆の内情を知れるもの、斯の如き大冊を公刊するに當りて、應さに起こるべき幾多の困難を輒ち豫想するものは、この著者とこの書肆との志を壯とし、一層の

敬意を以て、此書を肅讀せざる能はざりき。

しかも讀了して、余は大に失望したりき、それは最初の<sup>エクスペクテーション</sup>「期待」のあまりに大なりしたためなるなからんやと、自ら制して再考したれど、不幸にして余は著者十年の篤學が、何故にかゝる杜撰の書を産み、志賀氏半年餘の校閲が、何故に是正の雌黄を吝しみたまひしかの疑ひなき能はざりき。さはいへ斯の如き一家の困厄を、雙肩に擔ひて呱呱の聲を擧げたる嬰兒の身の上に、光榮あれかしと冀ふものは、<sup>われひと</sup>自他俱に違ふべくもあらぬ人情なれば、余も幾回が批議の舌を縛らまくおもひしかど、聞かが如くんばこの書も市場に大分の觀迎を受けたりといふことなれば、余がそゞろ言の、今となりて俄にその前途を沮むの患ひもあらざらむと、こゝにおもひつきたるまゝを書して、著者に問ふことゝはなりぬ、著者乞ふ微志の在るところを諒とせられよ。

第一に余の失望したるは、著者に何等の創見新説を示されざりしこと是なり、素より小説戯曲と違ひて、地理學の如きものは、其性質上何等の典據なくして、悉く自家の腦頭より按排組織せられ、我より進んでオリジナリチイを作るといふが如きは、いかなる天才者と雖も難んずるところなれば、余は著者が幾百千の書を引抄したるを横議するものにあられざれども、唯之を引抄して、手際よく綴り合わせたるに止まりたりとせば、書を著はずの本義は糊と鈇と筆耕の外に、幾何を贏ち得るものぞ、本書の每章を讀んで試に是は某の文より借り、彼は何の雑誌より轉載し來ると揣摩し、翻つて每章の終に掲ぐるところの引用書目と照繳するに、おもしろき程に的中す。著者素より例言中に辯じて曰く『各章の終りに主要なる参考書を附記したるは、是れ實は淺識を表白する者、余の深く耻づる所と雖、余が四周を觀察する上に、直接に間接に、幾多の指導を受けたる學者諸君子に對する感謝を表はすの意味に於て、予が當然なさざる可からずと信ぜし所』と、然り、他人の説を我物顔に剽竊して、腹笥の富を誇る術學者に比すれば、著者の括澹なる、そのペダンチックならざるところに於て、先づ頗る愛すべきを覺ゆと雖、この點に於てのみ正直なるを讚嘆せられて止むは、おそらく著者の本旨にあらざるべし。かくの如くして、天文、地文、地質、人類、動植物、社會等万般の書に亘りて、余は著者が能く讀み、能く<sup>(ママ)</sup>膽寫し、能く補綴したる勞苦を認めたれど、それらの材料を嚙下し、消化してこゝにはじめて一個牧口氏の胃腑を借りて醗酵せられたる新らしき滋養分は、この一千餘ページの大冊子の、いづこにも發見せられざりしこそ千古の遺憾なれ、況んや其引用書の大部分は、邦文のものにして、しかも近代の公刊に係はり、少しく斯學に嗜好を有するものゝ、概ね過眼一再に及びたるところのものに係はれるをや、又況んや所謂大作は深きがためにあらずして只廣きがためにして、性質上よりせず分量よりしたるためなるに於てをや、何人と雖も著者が列擧したる如きよろづや的目錄の土臺に立ちて、書を涉獵して作れば、一方ページも未だ必ずしも敢て難しとせざるをや。

第二は著者の文章なり、世には本邦科學家の文章が乾燥無味、偶ま催眠の媒たるに過ぎざるを嗤ふものあり、余もこれに惱まされたる一人なれど、さりとして亦この著者の如く、文學者ならずして例の六波羅やうを、この種の著書にまで及ぼされたるこそなかゝに眉を顰めらるれ、曰く『試に天魔を備ひ來り、巨鋸を以て吾人の生活する北海道を横切りて、一の平面となしたりと想像せよ』百五十頁（日本風景論に曰く『若し夫れ天魔を賃し來り、神斧を揮ひて日本國土の上より切割せしめんか、其横截面は鋭尖なる三角強を作らん』文章まで「文學」を調和せずとものことなり）『殊に石炭は國內に延長すれば』百六十四頁（石炭層ともあるべきか）『山中の静淑』百六十四頁（無論静肅の誤ならむ）『彼の坐禪なるものは畢竟精神の凝結する方法に外ならず』百六十五頁（意味を成さず）『何となれば非常なる非凡の超出にあらざるよりは、傾

斜緩慢ならんか、人は容易に之を超越すべければなり』百二十九頁等の類、余は著者が今少しく飾りつ氣なくして解り易き文を作らむことを希はざる能はず、殊に文中に引用したる詩歌の類を大方は『風景論』より孫引を試みたる如き、又同じものを引用書の殊なれるによりて二様の語を使用したる如き（例へば文中支那山系といふかとおもへば、地圖には崑崙山系となせるが如き）一定の見地なきを見るべし。

以上はこの書の大躰に於て、根本的に余の首肯し能はざるところなれど、尚ほ少しく細節に亘りて辯ずべし。

著者は山が高度によりて、一所に多種の植物動物を共生せしむるものあるに道ひ及ぼし、

聞説らく、甲州富士川の谿谷の邊り、叢竹積雪の重量に堪へず、凄まじき音を發して摧折せらるゝや、野猴其下に在りて是に驚き、悲鳴を發することは、甲州民の常に聞く所なりと、猴も竹も元來熱帶圈中の生物、然るに寒帶の代表者たる氷雪と共に、同一の場所に棲息せしむ、これ到底他國、殊に平原國に於て想像し得べからざる所、蓋し又山嶽の賜なり。（一二五ページ圈點原文のまゝ）

と引證したれど、こはいみじき藪睨みなり、著者の所謂『富士川の谿谷の邊り』とはどの邊を指したるか知れねど、要するに富士川谿谷は海拔甚だ高からねば、熱帶と寒帶とを併有するに足るべきほどの山を有するものにあらず、然るにその兩代表者を事實上に、併有せるは何ぞといふに、そは本土の在るところの緯度線が、所謂温帶にして、この寒帶兩帶を或程度まで緩和融合せしめつゝあるためにして、決して著者の言ふが如き山嶽の賜にはあらざるなり、著者は他國殊に平原國に於て、想像し得可からずといへど、實際著者が「平原國」を以て呼べる支那に、竹もあり、猿もあり、雪もあるにあらずや、著者以て如何となす。

人間の山に對する崇敬の程度は、其高さの加はるによりて益す加はるが如し、高サ一万二千四百尺、日本第一の高度を有したる富士山が、如何に日本人をして莊嚴の感を起さしめたるか……は、以て此事を説明するを得べきにあらずや。（一二六頁圈點原文のまゝ）

と、知らず著者は何によつてこの斷定を得たる、人民崇敬の程度が、必ずしも高低に原づかざること、相模の大山、遠江の秋葉山等、低くして、殆ど山と言ふ可からざるも、年々幾萬の縲索、賽するもの絶えず、信飛境上の大嶺崇岳、霄漢を突き、しかも祀られざるもの甚だ多し、是れ蓋し山の形状、位置、交通の便不便、都會村落の遠近等、頗る複雑したる關係より來れるものなれば、著者が單に山高きが故に崇敬の度益す加はるといふ定義を立て、一富士山をのみ擧げて、之を苦もなく肯定せむとするは單純なること兒童の見に似たり、但し高きものが低きものに比して、一般に莊嚴の感を起さしむるは、余も之に同ずと雖も『何故に然るや』の問題に至りて、著者が半句をも酬いざりしは惜しむべし、この間、人生地理學者の發見せざる可からざる消息あればなり。

火山の人間に於ける重要な影響は、特殊の風景を顯出して、無形上に人心を感化するに在り、火山の構造山（他の山？）と異なる所のものは、稜々たる山骨の露出にあり（一四六頁圈點原文のまゝ）

と、然れども何ぞ火山に限らむ。花崗岩も石灰岩も、皆「特殊の風景を顯出して、無形上に人心を感化する」なり、皆「稜々たる山骨の露出」を有するなり、花崗岩の如き殊に然り、著者このところ、火山の特性を擧げむとして、却つて普遍性を擧げたるを惜しむ。

支那山系と樺太山系と相衝突する（したる？）處の近くは、正に此國（信濃）にして、且つ富士帶火山脈の大破裂をなす（なせる？）所（一六一頁）

『衝突する處の近くは此國』といふ、然らば實際衝突したるところは何の國ぞ。

著者は日本人が懐郷の念に富める實例として、

或は加藤清正が、朝鮮の二王子を逐ひて感鏡道（感は威の誤植ならむ）に入り、日本海上遙かに芙蓉峰を望みて、想はず東拜無限の愛敬を捧けたるが如き、即ち是なり。（一六三頁）

を挙げたるに至りては駭目に値ひす、清正が元良哈<sup>フランカイ</sup>に於て富士を拜せる趣は『清正朝鮮記』等にも載せられ、確か『日本外史』にも出てたるとも記憶すれど、その小説なるは論なし、余は歴史家ならぬ著者が、之を引用したるを怪しまず、たゞ地理學専門の教師たる著者が、他に例もあるべきに、眞面目に之を挙げたるを嗤はずんばならず、富士山いかに日本一の高山なりと雖も、人の視力には限りあり、地球には窪隆あり、朝鮮より見られ得べきことは、斷じて無し、抑も著者はその之を仰がれ得べしとする何等かの理由を有せりや、幸ひに蒙を啓くを得む、況んや此一文は著者が嘗て北海道師範學校にて學生に講じ、後に同窓會雜誌にまで出だしたりといふに於てをや。

我邦には會津、甲斐、信濃、飛騨、丹波の中部等、處々に高原性の小地ありて、皆百米突以上の高度にあり（二〇〇頁）

と百米突以上の高地を有するものは、本邦何ぞそれらの四五ヶ國のみにして止まんや、然れども百米突以上の高度に在るが故に必ずしも高原性の土地とはいふ可からず、日本に在りて眞個高原性の土地を挙げむとならば、會津や、甲斐や、丹波などよりも、地學者が濃飛高原と呼べるところ、即ち美濃の大半、飛騨の全部、及び之に接せる越中、加賀、越前、近江の一部こそその好標本になるべけれ。その他に在りては紀伊四國の兩山系、相共に高原性を帯ぶ。

我邦には天龍川、射水川、球<sup>(ママ)</sup>摩<sup>(ママ)</sup>川の如き日本の三急流と稱せらるゝものゝ如きあり。（二一二頁）

俗に日本の三急流とは、富士川、最上川、球<sup>(ママ)</sup>摩<sup>(ママ)</sup>川をいふなり、著者の所謂天龍川射水川與からず。若し眞個の三急流を挙げむとならば、天龍射水はともかくも、球<sup>(ママ)</sup>摩<sup>(ママ)</sup>川の如きは選に入らざるべし。

著者は川の上流、中流、下流を立證するために、齋藤拙堂の「下岐蘇川記」を拉し來り、その文を部分的に抄して、云々の文は上流を寫す句、云々は中流の景、云々は下流の觀と、尤もらしく三段に別ちたれど（二一九ページ）土臺科學的觀念なき漢儒の文を、オーソリチーとして地理を説かむとするは、無理な話にして、拙堂の岐蘇川を下るや、伏見を發して桑名に到る間のみ、而して出立點たる伏見が、已に木曾川の中流以下にして、上流にはあらず、いづくんぞ彼の文によりて、上流の光景を看取することを得むや。

茲に降雨なくとも、常に濼々流れて止まず、さりとて湖源の認むべきものなし、雪水氷河に至りては、本邦に於て越中の立山山中に僅かに其に稍近似する流源を觀るのみといへば、他に全くあるべきなし。

知らず、著者は何の本據に立ちて、かゝる斷言を取てし得るや、氷河<sup>グレンジャフ</sup>に至りては日本に現存のものは、絶えて是なし、然れども著者が所謂『立山山中に僅かに其に稍近似する流源』といへるは、矧川氏が『風景論』に挙げたる針木峠の雪田のたぐひにして、この類及び山上の氷が、隆夏融けて流源を成せるものは、信濃、飛騨、越中、越後の境上に蜿蜒せる大山系、到るところには是あり、その他古の氷河の在りたる迹にあらずやとおもはるゝもの、即ち氷河の上に屹立せる山より、石片墜落列を作りて氷河の中央、もしくは兩端に堆を成せるもの、英語の所謂「モレーン」も、この附近の山中に多く認め得るは余の確言して憚らざるところなり、何ぞ輕々しくその雪水氷流の『他に全くあるべきなし』といふを得む。

以上は書中の第九章より第十一章まで、僅々三章の間に限られて、指摘したるもの、その他に至りては繁を厭うて絮説せずと雖も、湖水の分類法の如き、宛ら二十年前の地文學書に在りて、始めて見らるべきものなりしを惜む。

之を要するに、本書は『切抜の綴ぢ込み』としては、容量以外に嵩張らずして便利ならざるにあらずと雖、『人生地理學』の創作としては獲るところ幾と無し、著者がこれらの材料を拮序例する勞苦と、耐忍とは、余之を諒せざるにあらずと雖も、單純なる按排以上を望むこと余輩の如き讀者に在りては、竟に多大の遺憾を抱かずんばあらざるなり。

## 18 『地学雑誌』 第16年第181号 東京地学協會

明治37年 1月15日

人生に及ぼす地理學的影響

(牧口常三郎君著人生地理學の批評)

理學士 小川琢治 (註)

### 緒 言

明治二十九年四月二十四日、余丹後大江山を越えて宮津に到り、旅舎荒木に投じ、其夕志賀重昂氏亦た來り宿すに會し、初めて刺を通じて日本風景論の著者矧川先生を識るを得たり。

君余に語りて曰く、地理學の社會的方面の研究は趣味多き好問題ならずやと。其後果して河及湖澤其他の諸書の君の筆に成りし者續々公にせらる。今や又た君の細評を添えたる「人生地理學」の一大著書は君によりて世は紹介せらる。余當年の快談を想起し、轉た本書歡迎の情に堪えず。余は此の一千頁の大冊を完成せる著者牧口常三郎君の眞摯と勤勉とを驚嘆して措く能はざるものにして讀み來るに及び其涉獵の該博其着想の斬新其論斷の妥當、亦た滔々たる操觚者流の及ぶ所に非ざるに服せり。余の大體に於て此の著書に對する感想此の如し、然れども余亦た人生に及ぼす地理學的影響に關して個々の事實と考説を抱けるものなり。試に此の好著書の出たるを機とし、<sup>(マ)</sup>其批評を兼ね、<sup>(マ)</sup>此に其二三を掲げて牧口君并に、「人生地理學」愛讀者諸君の一顧を乞はんとす。

### 地理學の定義

自然の人類の身體并に精神に及ぼす影響を研究する地理學の一科を呼びて人類地理學 Anthropogeography と呼び、又た文明即ち人文地理學 Kulturgeographie (Cultural or Civilisational Geogrography) <sup>(マ)</sup>といへるはラツツエル氏を以て其鼻祖とす。是れ動物地理學若くは植物地理學の如く、人類に及ぼす土地氣候其他の影響を研究せんとする者なり。地と人との關係を論ずるものは此の文明地理學の範圍を脱出する能はざるなり。牧口常三郎氏の新著「人生地理學」なるものは實に此の定義に適中せるものなり。然れども氏は其例言に於て「人文地理學の名稱あり。之を單に「地文學」に對しての名稱とせば可ならんも、其他に於ては精確に内容上の意味を表はさず」といひ、之を斥けられたるは吾人の惜む所なり。氏は次に「人類地理學」といはんか、之れ比較的本書の内容を表はすに適當なりと雖も、既に「人類學」なるものありて特別の意味に用ひられ居るが如きを奈何せん」と謂ひ、又た此の「人類地理學」なる名稱をも取らず、以て人類學と混同するの虞ありとせられたるが如し。此の二種の名稱を此の如き理由の下に斥けて、別に耳新しき「人生地理學」の名を本書に冠せらるゝに至りしは多少奇に走るかの如き感あるを覺ゆ。固より人生地理學なる名、吾人は敢て之を不可なりと謂ふものに非ざるも、人文又たは文明地理學といひ、人類地理學といひ、共に既に判然たる定義ありて、何等の混雜の生ずる虞なき名稱たることは、吾人先づ一言此に之を辯ぜざるを得ず。

次に氏の地理学の定義として提出せられたる所を讀むに、曰く、「地理學とは地表に分布する自然現象と人類生活現象との關係を論ずるもの也」(第四一頁)といひ、又は結論(第九八八頁)に於て更に進で「地理學は地球の表面に一定の規律をなして分布する自然現象と人類生活現象(人生現象)との關係的智識なり」更に之を約言すれば、「地理學は地と人生との關係を説明する科學なり」といへり。氏は是等よりも更に進み(同頁の細字欄に於て)「地理學とは地理的分布をなす人生現象を説明する學をいふ」と謂へり。而して吾人は終に氏の所謂「人生地理學」なるものゝ定義を看ず。是に於て吾人は氏を以て「人生地理學」と「地理學」とを同一の意義に使用せるものとせざる可らず。少くも吾人の所謂「文明地理學」又は「人文地理學」なるものこそ如上の氏の「地理學」の定義に符合するものなれ。

此等の定義を以て直に地理學全般の定義なりとするには、吾人は容易に首肯する能はざるなり。看よ、自然現象を人生現象に關係なく研究するものにして、地理學の一部門たるもの甚だ多きに非ずや。氣温の分布、雨雪の分布、植物動物の分布等の如き研究は人類なるものに關係なしに研究するも、地理學の一部門として現存し得べきなり。自然科学の一たる地理學に於ける人類の位置は或る意味に於て猶ほ動物學に於ける人類の位置の如き者なり。若し造化が萬物の靈長として人類を造れりとの、一種の宗教的觀念を外にして、地球上に起る無生、有生の現象を通觀せば、地理學の範圍は必ず人生現象に關係ある事項のみと限らざることは甚だ明かならん。<sup>ウイリアムズ、ロバート、ミル</sup>「萬國地理學」の編者ヒュー、ロバート、ミル氏は其劈頭に地理學に定義を下して曰く、地理學とは「地球表面の諸現象の分布の、精密にして、節制ある智識にして、人類と其地上の四圍との相互の作用の説明を以て最終とす」と。此の定義と雖も尚ほ人類に重きを置くこと稍過當なるを免れず。吾人は地理學其ものゝ定義としては、單に「地球表面無生、有生一切の諸現象の分布を系統的に研究する科學」との一般の意義に止め、人類の生活現象と地球の諸現象の關係の如きは其一分科たるを主張するものなり。吾人固より人類地理學を以て最も必要な分科たることを認むるものなれども、固より其分科系譜の最高位を占むるものなることを認め、且つ、固より著者其人と共に其研究を以て地理學研究諸項中の最も趣味ある問題たることを認むるものなれども、「人文地理學」=「地理學」とは謂ふ能はざるなり。

地理學研究法の問題に關しては吾人亦た説あり。然れども今地と人との關係を論ずる方面を主とするを以て之を論ずることは他日に譲るべし。(第一稿完結)

注 明治38年10月に出版された第8版改訂増補以降の『人生地理学』には、志賀重昂の後に以下の牧口の文を添えて、小川琢治の書評を掲載している。

(小川の書評の前に)

本書の初版出づるや、地理學専門の大家を以てして率先批評を加へられしは本文なりき。當時先生には一面の識なかりしが、有名なる大論文、日本地質構造論によりて、心竊に尊敬措く能はざりき。然るに深厚の同情を以て虚心淡快、示教を惜まれざりし高誼は余の感佩に堪へざる所。文中の讚辭は却って恐縮する所なるが、余が考の及ばざりし所、及び記述の不備の爲めに招きし誤解の點は謹んで之を補ひ、且つ訂正する所あり。先生今や京都帝國大學に在りて斯學のオーソリチーたり。余は學會の爲めに先生の健全を祈る(著者識す。)

(小川の書評の後)

著者申す。吾人が研究の成果なる此人生地理學を本邦に於ける從來の所謂一般地理學の内容に對照するに全然一致せりとは云ふ能はずとも、大體の點に於て一致するを認む。而して其一致せざる點は一方の研究の足らざるか、若くは他方の地理學の範圍外として排斥せらるべき運命にあるべきが如ければ、兩者は内容に於て粗ぼ一致せりといふを得べし。依て兩者の區別をなさざりき。たゞこれが説明に就き初版にては十分本位を盡さざりしかば第八版の第四編の各章に於て之を補ひたり。又た本文中第九八八頁とあるは増補の結果第一〇六五となれり

19 『教育時論』 第680号 開發社

明治37年3月5日 新刊書紹介

◎人生地理學 牧口常三郎氏著 定價二圓 文會堂

地理學の人生に須要なるは、近來大に世に認められたり、殊に教育に關しては、ヘルバルト以降教育大家の等しく、教科としての位地の重要なることに同意す、而し重要なりとせらるゝは人文地理にあるなり、何となればこれは人生と地球との關係を論ずるものにして、換言すれば文科と理科との關係なればなり、人文地理學の重要それかくの如し、然るに我國に於ける此種の著述は、小藤博士の地理學教科書、矢津昌永氏の政治地理、志賀矧川氏の地理學講義、及有名なる日本風景論の數者に過ぎず、之を以て我中初等の教育場裡に於ては、まだ山川都市港灣の名稱及統計表を暗せしめて、妄りに兒童の腦力を徒消せしむるに過ぎず、而して實にこれ人文地理の何物たるかを知らざるに由るなり。

著者こゝに慨あり、多忙の職を參考圖書に乏しき地に奉ずるに係はず、拮据經營一千頁の大著述をなしたり、「人生地理學」即ちこれなり、其緒論に於ては、「地と人との關係の概觀」「觀察の基點としの郷土」「如何に周圍を觀察すべきか」を説き、第一篇には人類の生活(マツ)としての地、第二篇には地人相關の媒介としての自然、第三篇には地球を舞臺としての人類生活現象を論じたり。

大體より見れば、この書は小藤、矢津、志賀三氏の未だ爲さざりし所を爲せしもの多く、就中社會學に觸接せし見舞(マツ)多きは多とすべし、若し我教育者にして之を精讀せば、庶幾くは地理教科に生命を與ふることを得んか、(神田小川町)

20 『東亜乃光』 第3巻第4号 舍身庵

明治38年3月15日 雜録 新刊紹介

○人生の地理學 四版定價金貳圓

本書は東亜女學校の講師たる牧口常三郎氏の著にして地理學に精通の聞へ高き農學士志賀重昂氏の校閲と批評とを加へしものなり出版の日尚淺きに拘らず紙數一千ページ以上なるの大著書を既に四版迄も發行せし一事によつても如何に本書の有益なるかを推知するに足るへし、又著者は本書を著さんが爲め北海道師範學校の教職を擲ち諸有の困難に耐へ滿八ケ年間の苦心精勵に依て漸く大成せりと云へば尚更に斯學に志すものハ是非とも一本を購ひ其の得益に潤はるべし

發行所 神田區小川町壹番地 文會堂

<明治41年10月5日改訂増補第8版の書評>

21 『教育界』 第8巻第3号 金港堂書籍

明治42年1月1日 紹介批評

●人生地理學

志賀重昂氏閱評

牧口常三郎氏著

世間から好評を以て迎へられたる本書は、今や著者の訂正増補を経て第八版を出版せらるゝことと成つて、余にも著者から新たに一本を惠まれた。今回の訂正増補は、人生地理學本論ともいふべき第三編の諸章に増補を爲し、新たに第三十章「人情風俗地論」を加へ、又曩きに結論とありし一篇を地理學總論となし、地理學の概念及び系統上について數章を増されたとのことである。元來本書は人類の精神的及び物質的の 方面の生活、即ち經濟的、政治的、軍事的、

宗教的、學術的等諸般の生活と地理との關係を論じ、一般地理學に通ずる原理法則を説明せらるゝのが目的で、一般地理書とは、大に其の内容を異にしてをる。此の特色が、大に本書の世に歓迎せられつゝある所以であらう。乍序、本書の出版については、著者が貧苦と闘ひつゝ本書を大成せられし堅忍不拔の精神、志賀氏が公私の劇務を繰合せ永き間本書閱評の任に當られし恩情とは、兩氏が斯學に對する熱心の餘りに出でたることとはいひ乍ら、誠に學界の美談であるといはねばならぬ。聞けば、著者は、なほ、「日本人生地理學」「海洋人生地理學」等に筆を採つてをらるゝとのことである。著者が健在にして、斯學の爲めに益々貢獻せられんことは、余の衷心切望する所である。△背皮クロース製菊版一一四三頁△定價貳圓七拾錢（東京市神田區小川町一文會堂發行）（金僊）

22 『地学雑誌』 第21年第241号 東京地學協會

明治42年1月15日 新刊紹介

◎訂正増補人生地理學 定價二圓七十錢

文會堂發行

著者牧口常三郎氏より本書を寄せ批評せんことを望まる一見千四百三十三頁を包有せる一大冊なり。顧ふに去明治三十六年十一月本書のげけにせらるゝや世の絶大なる歓迎を受けたりき。當時予は著者と一面の識なく只其の書によりて其の名を知りしに過ぎさりしも志賀先生の序辭と著書の内容とによりて心窃かに我地理學界が此篇學者を得たるを喜びたりき。後互ひに相識りるに及びその質實清節自ら持し一意地學に心身を委ぬるを知るに至りて感謝と贊辭を禁ずる能はざるものあり。然れどもこれ著者に應ずる人格觀のみ乞ふ左に本書の内容を紹介せんか

緒論

第一章 地と人との關係の 概念 <sup>(マツ)</sup> 第二章 觀察の基點としての郷土

第三章 如何に周圍を觀察すべきか

第一編 人類の生活處としての地

第四章 日月及星（地上現象の總原因として） 第五章 地球

第六章 島嶼 第七章 半島及岬角

第八章 地峽 第九章 山嶽及谿谷

第十章 平原 第十一章 河川

第十二章 湖沼 第十三章 海洋

第十四章 内海及海峽 第十五章 港灣 第十六章 海岸

第二編 地人相關の媒介としての自然

第十七章 無生物 第十八章 太氣

第十九章 氣候 第二十章 植物

第二十一章 動物 第二十二章 人類

第三編 地球を舞臺としての人類生活現象

第二十三章 社會 第二十四章 社會の分業生活地論

第二十五章 産業地論 上 第二十六章 産業地論 中

第二十七章 産業地論 下 第二十八章 國家地論

第二十九章 都會及村落地論 第三十章 人情風俗地論

第三十一章 生存競争地論 第三十二章 文明地論



第四編 地理學總論

第三十三章 地理學の<sup>(マ)</sup>概念

第三十四章 人生地理學の發達

第三十五章 地理學の名稱並に人生地理學の科學的位置を論ず

第三十六章 地理學の研究法

第三十七章 地理學の豫期し得べき効果及必要

第一版の序に於て予が師事する小川理學博士は「其の涉獵の該博其着想の斬新其の論斷の妥當亦滔々たる操觚者流の及ぶ所に非るに服せり」と予は茲

は著者が如何によく自然と人生とを觀察し之を咀嚼し之を同化し以て地人相關の歸着を求めんとするに腐心せしか如何によく乾燥無味なりと誤解せられつゝある地理學を趣味津津たらしめんとするに苦惱せられしかに在り。而して第八<sup>(マ)</sup>段に於て特に第四編に大なる追加を加へられたる苦心にあり

由來地理學者の多くは文科より出でしものは科學の知識に缺くるあり理科より出でし人士は史的知識に缺くる所なきか本書題して人生地理と云ふ讀者或は著者の知識が前者に偏するなきやを疑ふものあらん予は其の然らざるを信じ均しく本書を以て此の兩種の地理學に提供せんとするものなり

著者予に書を寄せて云ふ「境遇の關係上充分の増訂も出來不申云々」蓋し第二十一章の如き其一ならんかこれ君の罪にあらず我が社界の罪なり嗚呼藤山氏已にあらず君亦その不遇を嘆ずるなるべし然れども君の勢氣は日一日に壯なり他日大成の期あるや必せり社會亦亦しかく冷淡なるに非るべし。(小林房太郎妄評)

付記：新聞雑誌の人生地理學の廣告を見ると、「各新聞雑誌社の公評御申込次第進呈ス」(『日本』明治36年11月7日 増刷廣告)、「各新聞雑誌批評四十余頁の冊子出來す郵券二錢御送金次第贈呈す。」(『日本』明治37年4月3日 4版廣告)とあり、書評の小冊子が作成されていることがわかる。

出版側が重視した書評は、『北海道教育雑誌』、『信濃教育會雑誌』の廣告では、萬朝報、教育實驗界、報知新聞、日本之小學教師の批評要旨を、『日本之小學教師』、『帝國書籍新報』の廣告は、地學雑誌、萬朝報、大阪朝日新聞、報知新聞、日本人、日本、實業之日本、日本之小學教師、慶応義塾學報、帝國文學の批評要旨を、『國民評論』では、地學雑誌、東京朝日新聞、萬朝報、教育時論の批評要旨を掲載していることから知ることができる。